
デスティニーな兄

六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デステイニーな兄

【Nコード】

N7546Z

【作者名】

六

【あらすじ】

最早物語は終わり、そして皆は明日へと歩き始める。

それぞれの歩みはあるだろうけれど、それでも歩む先の道が混じっている事を信じながら。

切っ掛けとなった人物は織斑万春。織斑三兄妹の長男。またの名をラストサムライ。

どこかへと消えてしまった彼を知るため、彼女もまた歩み始める。

IS学園一学年担当学年主任

織斑千冬（前書き）

メリークリスマス。

これが六のクリスマスプレゼントです。

兄さんのことか。ああ、よく覚えてる。

目蓋を閉じなくてもはつきりと、刀を揮うあの姿が目には焼きついてるわ。

それで、お前は兄さんの何を聞きたいんだ？

ふむ、思い出、か。

しかし、あまりお前が期待できるものなんてないだろう。いや、決して兄さんと私の仲が良くなかった、というわけではない。寧ろ私たちは昔からずっと仲がよかったな。ただお前が望むような珍しい過去なんて私たちにはなかった。それだけさ。それでも聞きたいか？

……よし、ならば少しだけ教えてやろう。おりむらばんしゅん織斑万春という男の過去を。

ふん、身構えなくてもいい。それほど面白くもない話だしな。

取り合えず、お前も知っているだろうが私たち兄妹が両親に捨てられてからのことでも話すか。一夏は覚えていないだろうが、両親は私たちを大事にしていた。それこそ普通の家族だった。少なくとも仲は良かったと言えるだろう。特筆する事もない、ただの家族だ。

しかし、ある日忽然とあの人たちが私たちの前から消えてからそれも変わった。

中でも兄さんはすぐさま仕事を始めたな。あの人たちがいなくなった次の日から、兄さんは篠ノ之柳韻さんの紹介で仕事をしていた。だからこそあの頃私たち兄妹は食い扶持を繋げる事ができたが、その時は兄さんはどのような仕事をしていたのか、あまり話してくれなかったな……。

ただ、私たちに知ってほしくなかったのだろう。あの人は自分が苦しい時や辛い時、それに悲しい時ほど気丈に振る舞い自分の事を隠すのが上手かったからな。……兄さんがそういう人間だと気づいたのは、それこそずっと後の話しになるが。

話を戻すぞ。働き出した兄さんだったが、あのひとはそれでも剣をやめなかった。いや、やめられなかったと言う方が正しいか。

兄さんはいつだって『俺にゃ剣しか取り得がねえんだ』と笑いながら言っていたが、あれは正鵠を得ていた。それほどまでに兄さん

は剣にのめり込んでいた。だからこそ篠ノ之流剣術を習った果てに、兄さんは独自の研鑽を積んで自分の剣を手に入れようとしていた。

ああ、その通りだ。普通は自分の剣など持つべくもない。新たな流派を生み出すようなものだからな。

……ただ、兄さんには才能があった。剣士としての才能が。刀に愛される才能がありすぎた。

私は兄さんの後で道場に通い始めたからわからなかったが、道場には篠ノ之柳韻さんとともに打ち合える人は兄さんしかいなかった。いや、打ち合うと言うのは違うな。篠ノ之柳韻さんだけがまともに兄さんと『斬り合える』人だった。

兄さんはおかしな人でな。竹刀だろうか、木刀だろうか一度斬られてしまえば負けという考えを持っていた。それこそ半端な形で入ったものでも負けたと勝負を降りていた。ふふ……潔いなんて立派なもんじゃない。あの人は頑固で勝ちたがりなんだ。だからこそ信念を決して曲げず、最後まで己の矜持を貫き通していた。剣であるうが、ISであろうが、だ。

そんなあの人だったからだろうが、剣の腕は天井知らずだった。すぐさま柳韻さんを越えていったよ。もう道場では誰も兄さんの相手が出来なくなった。私も含めてな。免許皆伝の称号を僅か十代の子供が与えられたのだ、それほどの腕だった。だからこそ、今度は

自分で腕を磨き模索するしか道は残されていなかった。

苦しそうだったぞ、あれは。普段明るい兄さんがそれを隠しもせず汗水流して顔を歪ませながら、延々と剣を振っているんだ。……正直、見てられないと思ったさ。けどな『くはは、恥ずかしいところ見せちまったな』と兄さんは私に気づいて言ったが、あれほど美しい時を、私は知らん。無骨で泥臭くて、惨めにも程があったが、懸命に己へと問いかけて一心に剣と向き合う兄さんは、……そうだな、かつこよかった。

だからこそ、私は兄さんの助けになりたいと思った。兄さんがいなければ私はもつと余裕のない人間になっていただろう。だが、兄さんがいたからこそ私は中学高校に通えていけたし、一夏だったそう。私たちは兄さんがいなければまともな生活さえ送れなかった可能性がある。もしかしたら離れ離れになるかもしれない。だから私は兄さんに感謝して、人としても家族としても、そして剣士としても女としても憧れていた。

うん？　好きだったのかだって？

はは、……そうだな。私は兄さんが好きだ。……うん？　おかしな事ではないだろう。何て言っただって家族だしな。

けどな、お前にもわかるかもしれないが、あれほど優良物件な男なかないぞ。

顔も整っているし、腕っ節も凄まじい。私と違って気さくで、更に経済力もあった。

……それに、あの人は『世界で始めてISを動かした男』だ。兄さんのネームバリューはそんな所そこの男では太刀打ち出来ぬものだったし、一夏がISを動かせると発覚するまで『世界で唯一ISを動かせる男』として業界の最前線を無敗で駆け抜けた人だぞ。あの頃、兄さん目当ての追っ掛けは男女問わず凄絶だった。そう言えば公式戦には必ず駆けつけ、移動のルートさえも押さえるような莫迦もいたな。つまりはだ、あの人以上の男なんているはずないさ。

……ブラコンではない。事実を述べただけだ。

どこまで話したかな。……ああ、兄さんの腕だったか。お前も知っている通り、あの人は剣士としての信念に基づき、清々しいまでに己の剣を手に入れた。どうやってか、と聞くな。あまりに無粋だ。……それに、言葉にしたって理解は出来ないだろう。ならばこそ、実際に兄さんの剣を見たほうが早い。お前も見えてきたはずだ。兄さんの太刀筋を。……だからこそ、言葉は不要だ。

事実、私は兄さんの剣術をまともに理解する事が出来なかった。

ああいうのは見ただけではわかるはずもないんだ。だから少なくとも、モント・ケロレン第一回IS世界大会格闘部門決勝戦で兄さんと戦うまで、私は兄さんが高め続けた剣の極致を把握する事ができなかった。

ああ、そうだ。お前の知っている通り、兄さんはあのモンド・グロツソで一度も被弾せずに戦い、しかもISの特性を殆ど使用せずに勝利を収め続けた。ハイパーセンサーやスラスタークらいか？あの時使っていたのは。

更に兄さんは決勝戦で私と戦うまで、一度も地上から足を離さずに勝利してきた。……ああ、まともではない。

結果は知つてのとおり、私の負けだった。

けれどな、気持ちよく私は負けたのさ。

……負けたのに気持ちが良いなんておかしいって？確かに、前にはわからんだろうな。いや、馬鹿にしたのではない。兄さんは剣士として私と戦い、私は剣士として兄さんに挑んだ。ただそれだけさ。それだけの事さ。……ただ、それが私には嬉しくてな。

研ぎ澄まされたものというのは実用性と共に芸術性さえ兼ね添えるが、兄さんのあれは違った。兄さんはあくまで剣士で、それ以外を認めはしなかったのさ。だから兄さんは自身のIS『灰鶴』を纏いながら剣士としての自らでもって在り続けた。

あの時受けた太刀筋は、今も覚えてる。あまりに鋭く、あまりに疾い一撃が空を切り裂きながら私の首を狙い、それを受け止めようとすれば、いつの間にか私は斬られようとしている。

兄さんの対戦者だった相手の殆ど？気づけば斬られ、いつの間にか負けていた？と口を揃えて言っていたが、あれはそういう次元だった。

剣は自身の担い手である剣士を語るのさ。濃密な時間をかけられて練り上げた拳動、理合。ただ無作為に揮われた一筋の太刀が人生を物語る。だからこそ、私は兄さんのそれを受けられる事と、兄さんに全てを曝け出せたあの瞬間が忘れられない。無論、忘れたくもない。

少なくとも、モンド・グロツソで兄さんに負けた相手には悪いが、私は兄さんの太刀筋を理解できたし、更に一度だけだが兄さんを空へと飛ばした。あれだけでも私には誇りさ。

だから、私はブラコンではない。……次はないぞ、わかったな？

……結局、剣士としての兄さんに敵う者もなく、兄さんは格闘部門優勝者となり、私は総合優勝を果たしブリュンヒルデなどと呼ばれるようになった。

ああ、あの試合だけだな、私が敗北したのは。兄さんが他の競技にも興味を持てば、どうなっていたかわからないが、兄さんは格闘部門しか出ていなかったしな。

当然だ、私が兄さん以外に負けるはずがないだろう？

ふっ、そういえばお前は知っているか？ 兄さんが格闘部門で優勝した後、兄さんにどのような称号が与えられるか、少しもめてな。

結局、兄さんの試合を見た一般市民が兄さんを最後の侍と呼び始めてから、兄さんの称号はラストサムライとなったんだ。
ラストサムライ

……似合わないと思うか。確かに、似合わないし、私も似合わないと思った。だけど、兄さんはあれを思いのほかに入っていてな。あの人は時代劇とか大河ドラマが好きだったからな。なんだか可愛らしかったよ。

……ほう、何か言いたいような顔をしているな。

……そうだ、世界は女尊男卑だ。兄さんの活躍はなかなか物議を醸していた。特に時の風潮に便乗した莫迦どもがな、いらぬ疑いをかけて兄さんを邪険にした時など、思い出すのも腹立たしい。今でも腸が煮えくり返る。……まあ、そいつらも時機に黙らざるを得なくなっただがな。

しかし、予想外な事に兄さんは世の男たちに受け入れられた。

恐らくだが、彼らは兄さんを世界で唯一の男性IS操縦者としてではなく、ただのものふとして受け入れたのだろう。事実、調査によれば、兄さんが優勝した後子供の剣道部志願者が増加したという報告もある。一夏も剣道をやる奴が増えたと嬉しそうに言ったな。

理由、はある。兄さんがISの特性を殆ど使用せず、ただ剣士としての力量のみで戦っていたからだ。

……納得のいかない顔をしているな。

確かにそれだけが理由というのは、おかしい話だがな。

だが、男性唯一のIS操縦者という立場上、兄さんは男に恨まれるはずだった。お前にはわからないだろうが、女尊男卑の煽りを受けた世の男性はISに良い感情を持っていない。

ISが配備されて職を失ったもの、女の理不尽な物言いに嵌められたもの、そしてそれを許す社会。男よりも女が優秀である、と根拠のない持論を展開して悦に浸る阿呆もいる。男が今の世を恨み、

憎むのは当然だった。そこに現われたのが兄さんだ。

……兄さんは剣士だった。あの人は剣士としてあり続け、剣士として障害を切り裂き続けた。

ISを纏いながら、己の剣士としての技量のみを駆使し、そして優勝した。

だからこそ、世の男性は兄さんを受け入れたのだと思う。これがISという兵器を使用する男だったら、女からも男からも排斥されるのがおちだ。

そんな兄さんだから、第二回モンド・グロツソには特別招待者として呼ばれた。

ああ、お前も知ってるのか。あるいは当然か……まあ、いい。

そこで昨年総合優勝し今回も日本代表として参加していた私と、昨年格闘部門優勝者で他の国家代表選抜との特別マッチを組まれていた兄さんだが、二人して棄権した。

ん？　なぜ兄さんが特別マッチに参加したのか？

……そもそも兄さんはな、日本代表の座に興味を持っていなかったんだ。競技として戦い優劣を競う事ではなく、ひたすら真剣勝負での勝ち負けに拘り続けた兄さんは、モンド・グロツソや代表と言ふものにさえ見向きしなかった。

では、何故第一回モンド・グロツソに参加したのか？

金だ。

兄さんはな、金が欲しいがためにモンド・グロツソに参加し、優勝したんだ。

軽蔑するか？ 兄さんを。

……そうか。お前も変わった奴だな。

実はな、兄さんは私たちの生活費を稼ぐためにモンド・グロツソへと向かったのだ。

その時兄さんは学校にも行かず、自らが唯一の男性操縦者であるというメリットを活かし、その情報や実験への参加で金を稼いでいた。あの莫迦に聞く限りだと、随分とあくどい稼ぎ方をしていたら

しいがな。その金で私たちの生活費をまかない、学費や必要費を払っていたのさ。

ほら、かつこいいだる兄さんは？

……こほん、話を戻すぞ。

第二回モンド・グロツソでの棄権だったか。あれはな、お前も知っている通り、モンド・グロツソを観戦するためドイツに来ていた一夏が誘拐されたのさ、忌々しいことに、な。だから私たちは一夏を助けるためにモンド・グロツソを棄権した。

しかし、な。……兄さんは私よりも早く気づいたらしく、早々に一夏を救いに向かった。そこで兄さんは誘拐犯と戦い、左顔面を斬られ、左目を失った。

私はショックだったよ。

兄さんは『柳生十兵衛みたいでかつこいいじゃないかい』となんでもない風に笑いながら言ったが、兄さんに頼られていないと言う事も悲しかったし、それ以上に兄さんを助ける事が出来なかった自分が惨めで、悔しかった。

しかも、兄さんはこの怪我を理由に現役を引退し、その後ドイツへの借りを返すため私の分まで伴ってドイツ軍の教導に向かい、少しも遭う事が出来なくなつた。

あれほど自ら無力さに絶望した事はなかつた。正直、兄さんがいない間、一夏がいなければ心が潰れてしまいそうだった。……それからだ、本気で強くなろうと思つたのは、兄さんと並んで胸を張れる様に強くなろうとしたのは、家族を守るぐらいに強くなろうとしたのはな。……だがな、私の分までドイツへと向かつた兄さんに申し訳がなくてな、だからこそ私は兄さんのぶんまで一夏と共にいようとして、代表を引退したんだ。

……おかしいか？ 家族のために今まで積み上げてきたものを台無しにするのは。

ふふ、言うじゃないか餓鬼。

私自身、後悔はしていないし、未練もなかつた。今でもあれでよかったと思つている。あの時の選択は間違つていなかったとな。それに、一線を退いて見えるものもあつた。

だからIS学園で教師と成り、家に帰れば一夏と過ごす、そんな生活に満足していた。ただな、兄さんがいないのが淋しかったよ。

……まあ、それも兄さんがドイツでの教導が終えて、IS学園で働く事になるまでだがな。あの人が教師になるなんて、想像もしていなかったよ。

あとはお前の知る通りさ。兄さんはIS学園で私と働き、そして……。

……まあ、いいだろ。この話はここで終わるとしよう。

また機会があれば、何か話してやるぞ。

IS学園一学年担当学年主任

織斑千冬（後書き）

始まってしまった連続投稿。

果たしてクリスマスが終わるまでに完結するのか。六にもわかりません。

IS学園一年二組担任 山田真耶(前書き)

メリーメリークリスマス!

IS学園一年二組担任 山田真耶

私が始めて万春さんと会ったのは、万春さんがIS学園に赴任してきた時でした。

いえ、以前から万春さんは知っていましたよ。ほら、万春さんは千冬先輩と合わせなくても有名人じゃないですか。だからよくテレビにも出ていましたし、モンド・グロツソでの試合や他の公式戦でも姿を見ていましたので、どういう外見なのかは把握していました。左目の傷跡も印象的でしたし、待機状態の『灰鶴』が剣つていうのも様になつてるなあつてずつと思っていましたよ。

けど、あの時職員室で万春さんとお会いして、びっくりしました。

代表候補生どまりだった私からすれば、万春さんは雲の上の人だったのでどうにも実際に会うまでその人がいると思っていなかったのかもしれない。い、いえ！『世界で唯一の男性IS操縦者』だった万春さんを疑っていたわけではありませんよ！

ただ、本当に万春さんがここにいるんだっていう実感がなかったんです。それにあの『織斑兄妹』が目の前にいると思うと、その、なんとというかドキドキしちゃいました……。

……先輩はIS学園の先輩でもあったので、大丈夫だったので

けれど。そんな、ブリュンヒルデを蔑ろにしているわけではないです！

初めて会った万春さんの印象ですか？ ……朗らかな人だなーと。

あの、貶めてなんてません！

テレビや試合場で見る万春さんは触れれば斬れてしまいそうな、刃の切っ先みたいな人だったんです。それに第一回モンド・グロツソでの万春さんの試合を見ると、なんだか怖そうな人だなんて思いました。視線も鋭いですし、立ち振る舞いもです。だから決勝戦で先輩と万春さんが並んだとき、本当に二人とも似てるって思ったんですよ。見た目がとかじゃなくて、上手くは言えないんですけど、根本的に見えないところで繋がっていると言いますか。

だけど、職員室にいる万春さんは、その、とてもものんびりと言うか、マイペースな方でした。『ま、気楽に行きましょうや』ってお仕事って雰囲気に関係なく言っていましたねえ。

正直、あの時は万春さんじゃない人が来たんじゃないかって思ったんですけど、先輩と仲良く話しているあの人を見て、やっと目の前にいる男性と織斑万春さんが繋がったんです。

それから万春さんはIS学園で勤務しました。立場としては私の同輩に当たるんでしょうか。私、あのラストサムライと同じ立場にいるって思うと、すごくがちがちなったの覚えてますよ。……もちろん、私と万春さんの意味合いはすごい差がありますが。

教師としての万春さん、ですか？

そうですね。……何とか、いつもフラフラとしてました。いえ、そそそそんな、悪口なんかじゃないですってば！

教師としてやってきた万春さんでしたけど、あの人が担当しているのは実践訓練のみで、ほかの授業は担当してませんでした。……というよりも、出来ませんでした。

うっ、……。実は万春さん高校に進学してなくて、しかも中学校も殆ど通っていないかった状態なので基礎学力の方が……。理由はそれとなく耳にしていますし、家族を養うためと言うことも聞いていましたけれど、でもやっぱり難しいんじゃないかと思いました。

いえ、だからと言って万春さんが教師として力不足だったわけはありません。寧ろ戦闘という場面に関しては、あれほど理に適った戦術理論を実践形式で見せながら教えられる方は万春さんを除いて他にいませんでした。

もともと万春さんは私なんかよりも遥かに長くISに関わった人です。それこそIS創成期からずっと活躍し続けてきた方ですから、経験という点で万春さんの話はとても貴重なものがありましたよ。

……。本当ですよ？

それに、万春さんは気難しい生徒と上手く付き合える方だったので、そちらのほうではよく相談に乗ってあげていたそうです。よく万春さん『俺は無頼漢みたいなもんだしの』って言ってましたが、そういう点であの人を信頼する生徒も多かったです。非公式ですが、学園内でファンクラブがあったのも事実ですし。

何故知っているかって？

えっと、実は私もそこに参加

していて、それで……。あの、これは先輩には内緒にしてください。約束ですよ？

……ただ、万春さんは自分の役割をこなすだけで、それ以上の事はしませんでした。

えっと、その。……万春さんは教師として非常に優秀だったんですが。……ええっと、真面目に働いてくれないというか、何と云うか、教師に向いていないといえますか。

いつも自分の担当はこなしていたんですが、それもたまたまに忘れてしまいますし、しかも授業しても『まじいまじい』と煙草吸ってましたし。サボる事も多くて、それどころか職員室にいることも稀で……。授業を担当する先輩の変わりに、よく万春さんを探しにきました。

だから、いつの間にか万春さんを探すのも私の仕事に入っていた

んです……つづ。

あ、でも、でも！ 万春さんよくそれで探しにいった私に色々ごちそうしてくれました。ご飯とか、ジュースとかコーヒーとか。それで『山田は楽しい奴だねえ』と言っていました。私としては可愛いとか、綺麗とか、その……。

だだだ大丈夫です、なんでもありません！

……万春さんがどんな授業をしていたかですか？

そういえば、あなたは万春さんの授業を受けてないんですよ。

万春さんの授業は、その、なんとというか、……すごかったです。

万春さんが担当する授業は希望者のみが行える実践戦闘演習だったのですが、あまりに過酷で人気そのものはありませんでした。私も一度参加させてもらったのですが、……ついていくのがやっとでした。いえ、そんな軍隊みたいな訓練をしたわけじゃないんです。生身での戦闘をはじめ、組み手、武装戦闘、そしてISでの断続的模擬戦闘を延々と続けていくんです。……シールドバリアー機能を切断して、ですけど。

『俺にやお前らに教えるもんなんざ、なーんもねえんだ。だから勝手にわかれ』と万春さんは言っていましたけど、万春さんは生徒に身体で覚えさせようとしていました。だからシールドバリアーを切ったIS訓練を行わせたり、ひたすら戦わせたりさせていました。そうですね、あれはISのために行う訓練と言うよりも、痛みを知るための訓練と言ったほうがいいでしょう。『痛くなかったら意味がねえ』……万春さんの言葉です。あの頃は千冬先輩の指導と合わせて、鬼の織斑兄弟なんて呼ばれていましたしね。

そんな授業をしているのですから、生徒さんには傷が絶えませんでした。皆さん女の子ですから傷跡なんてあつてはならない事なんですけど、生傷はまだ良い方でした。中にはIS同士の衝突で骨折をした生徒もいますし、万春さんとの組み手で泣き出す生徒さえいました。正直、怪我人の総数はひどいものでした。

ええ、本当にすごかったです。先ほども言いましたが、そんな事ばかりいつもするから、万春さんの授業に人気そのものはありませんでした。ですけど、万春さんの授業を選択して耐え抜いた生徒さんの殆どはクラス代表になりましたね。そして卒業後には国家代表へ選ばれた生徒もいます。

はい、凰さんや織斑くんがそうですね。お二人は万春さんの授業を選択して、見事に二年次ではクラス代表戦で優勝準優勝、そして卒業して遂には国家代表になったんです。凄いですよねーお二人とも。

そんな訳で危険な授業ではありませんでしたが、成果が認められていたため万春さんの授業は行われていたのです。

……選択した生徒さんの殆どが万春さんが面倒を見た子ばかりでしたので、彼女達の熱の入りようは凄まじいものがありましたね。他の先生では難しかった生徒さんが、万春さんの授業を受けてからまるで戦闘集団のような感じになっていましたよ。

IS学園が幾ら兵器を教える学校とは言え、元々は普通の家庭で育った女の子も多かったはずなんですけれど、プロフェッショナルって言えばいいんでしょうか？ 兎に角、学生という感じじゃなかったです。何人かの生徒は彼女達に怖がってさえいました。傷だらけの女の子達が集団でいるんですから。

あ、そういえば万春さん、剣術部の顧問でもありましたね。今は違う職員が担当していますけれど、発足後は部を立ち上げた万春さんが担当していました。

やっていた事は万春さんがやっていた授業の延長みたいなものだったんですけれど、その……えぐかったです。

授業のほうはまだ授業としての形式があって、しかも先輩の監視もありましたから大丈夫だったんですけど、剣術部のほうはそれもあまりなくて、万春さんが思うようにやっていたんです。

気分で変える時もあったらしいんですけど、一対多での模擬戦や、無手対武装、超遠距離対近距離みたいな事を私が知る限りではやっていました。他にもどうやらとんでもない事をやっていたらしいん

ですけど、それを生徒さんに聞くと「地獄って普通にあるんですね」と笑いながら言っていましたね。……一体どんな事させていたんでしょうか、万春さん？

……本当に厳しかったですよ。私も今までのままじゃダメだと思っ
つて、一度やらせてもらったんですけど、……うう、今でもトラウ
マですよ。『はは、山田一回死んだの』って顔に当たる寸前で振り
ぬかれた剣は。

ただ、殆ど辞める生徒はいなかったと聞きます。辞めるにしても
已む無い事情によるもので、皆必死になって訓練していましたよ。

ふふ、不思議そうな顔をしていますね。

私も最初は不思議だったんですよ。どうしてこんなに辛いのに万
春さんについていくのかって。

でも、彼女達を見てたらなんとなくわかった事があります。

万春さんはそんな気もなかったんでしょうけど、彼女達にとって
万春さんの傍はひとつの居場所だったのです。訓練とかは確かに辛
くて厳しいものだったんでしょうけど、皆表情が輝いてました。

彼女達の大半はIS学園で成績も悪く、それに素行も良くない子
達ばかりでした。悪い子じゃなかったんですけど、なんとというか、

個性が強い子ばかりで。それでクラスでも孤立してたり、やる気もなくして授業にさえ出る事を止めた生徒さえいたんです。IS学園は厳しい学校ですから成績次第では退学ということさえありますから、残念ながら彼女達の退学は時間の問題とさえ思われていました。だけど、彼女達は万春さんと出会ってから大きく変わっていきましたね。

何せラストサムライが教えるのです。世界中でもこんな事滅多にありませんよ？ 万春さんの手解きを受けられて、辛い分だけ腕を上げる事が出来るのですから、強くなつていく実感が持てたのでしよう。

それに万春さんの人柄もあつたんでしょうね。あの人は厳しいのに、本当に辛くてどうしようもない人がいると放つて置けない人ですから。あは、『そんな柄じゃねえさね』ってもしかしたら言うかもしれませんね、万春さんなら……。

え？ 良い表情をしてた？

えーっと、ありがとうございます？

まあ、そんな訳で万春さんと波長の合った一部の生徒さんには極端に好かれていましたね。

その中には織斑くんや凰さんもいましたよ。

今では万春さん、千冬先輩、そして織斑くんを合わせて？織斑三兄妹？とIS業界では呼ばれるようになりましたけど、万春さんからはかなり厳しくされてましたね。授業や部活以外ではそうでもなかったんですけど、こと戦闘においては他の生徒と同じように扱われてました。……皆それが嬉しかったようです。万春さんは鼻屑をしないんだって。

まあ、織斑くんが第二の男性適合者であるとわかってから『さすが俺の弟だわの』って言ってましたから、弟さんが可愛くてしかたなかったんでしょう。

……だから万春さんの弟子を名乗っていたラウラさんが転入した時は万春さんの教え子さんたち、荒れに荒れてましたねえ。

あは、はは……あまり思い出したくはないんですけど、聞きたいですか？

……生徒さんからの要望ですから、仕方ありませんね。
はあ。

詳しくはその場に居合わせたわけではないので私も知らないんですけど、その時使用していた剣道場がめちゃくちゃになって、怪我

人まで出たらしいですよ。それでもラウラさんに食って掛かるんですからね、すごいですね。

なんか生徒さん皆怒っていたようで、しかも万春さんも『やるならとことんやっちまいな』とか言って止めようとしなかったのだから、余計に収拾がつかなくなったそうです。結局先輩が止めきて事なきを得たそうなんですけれど、……ラウラさん、先輩にも斬りかかったそうですよ。『師匠の栄光を汚した』と言ってたと報告もありますが。

……もしこの話を詳しく聞きたければ、ラウラさんに聞いたほうがいいですよ。やっぱり、私の口から言ってもどこかおかしくなっちゃいますからね。

あ、そろそろの授業の準備をしなくちゃいけませんね。

ふふ、次に万春さんが帰ってきたとき、私がしっかりしている姿を見せてびっくりさせようと思ってるんです！

それじゃ、行きますね？

……最後に、私が万春さんを好きだったかですか？

そうですね。

それは、秘密です。

大人の女性は簡単に秘密を話さないものだって万春さんが言っていましたね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546z/>

デスティニーな兄

2011年12月25日02時49分発行